

市民意識の高揚過程

露 崎 真 澄

1. 市民であるということ

日本において、市民という地位はどのようにして獲得されたかという点、欧米諸国、特に一八世紀から一九世紀にかけてのイギリスやアメリカにみることでできる革命の結果による「自律的な市民」という地位獲得方法ではなく、地方自治法の市の要件を満足すれば、市に昇格し（地方自治法第八条）、そこに住む住民は「市民」と称される（地方自治法第一〇条）ことになり、権利と義務が詳細にわたり規定されるのである。つまり、地方自治法という「法律の枠内」で与えられたものにすぎないのである。現実的には、「住民登録」をしてしまえば、自動的に「市民」としての資格は得られるのである。その裏には、人間としての自我の発芽を常に摘みとってきた国家社会優先の思想が市民社会の形成を阻んできた、という事実があるのである。

2. 市民意識の正統的概念

現在、わが国では都市における市民意識を次のように分類・類型化している。(1)

- ① 都市共同体の構成員としての意識
- ② 市民社会の一員としての意識
- ③ 地方自治体の住民としての参加意識
- ④ 伝統的郷土意識（愛市精神）
- ⑤ 市民的感情（市民気質）

これらの五つの類型は、あくまでも理論的な分類であり、現実的には、これらの五つの類型が複雑に絡み合い「市民意識」として現出してくるのである。そこで、「市民意識」としてどれを正統的概念とするかであるが、これには諸論があり、近江哲男氏は①を、倉沢進氏は②をそれぞれ正統的概念として論述している。日本の歴史的背景を考えると、①よりも、②の概念を正統化したいが、市民社会という段階を踏んでいない日本の社会を考へて市民大衆社会という言葉置き換えて、②を正統的概念としたい。(注：共同体社会(前近代社会)から市民社会への転換がスムーズにゆかなかったところにおいてのみ、大衆社会状況が発達する。)

中間集団が無力感を捨て、自らの価値意識を確固と保持する社会、つまり市民社会へ大衆社会の不等式で表わされるような社会Vの一員としての自治参加、市政参加意識を正統的概念としたい。

注(1) 都市問題 第六二巻 第七号 「市民意識の開発と方法」 倉沢進を参照

3. 市民意識構造

日本の市民意識ないし自治意識と呼ばれる意識構造を、行動体系と価値意識とを相互に関連させ類型化し、住民の意識の傾向を理解しようとしている試みがある。

倉沢進氏は、市民意識を自治意識ないし市政関与意識が重要な意味を持っていると考え、これに価値意識をクロスさせ図式化している。

ここで彼は、「望ましいのは、閉ざされた地域社会への志向である特殊主義的な愛市精神や、地域社会帰属意識であるよりも、開かれた地域社会への志向をふくむ普遍主義的な市民意識に支えられた自治意識ないし市政関与意識であることは、いうまでもないであろう。そしてまた、現代社会における不可逆的な社会変動の方向である都市化・流動化がますます進行するとすれば、これからの自治、市政関与意識は、どうしても後者、つまり市民意識に支えられたそれであれば、高揚の可能性を考えることはできない。」(2)と述べ、「市民意識」を本格

(第1図) 自治意識ないし市政関与意識強い

普遍主義的価値意識	I 本格的市民 (市民意識に支えられた自治意識)	II 伝統的地域人 (愛市精神や地域社会帰属意識に支えられた市政関与意識)	特殊主義的価値意識
	III 観念的市民	VI 伝統的無関心	

自治意識ないし市政関与意識弱い

注：都市問題 第62巻 第7号

的市民というIのタイプに求めている。また奥田道大氏は、地域社会の分析枠組として主体的・客体的行動体系と普遍的・特殊の価値意識の両極をクロスさせ、地域社会のモデル化を行なっている。

これらの図式について考えると、主体的・客体的行動体系、自治意識ないし市政関与意識の強弱、また普遍的・特殊の価値意識の分類ラインをどこに引き、類型化するかという問題である。それに、これらの図式は、市民意識というものを静的にとらえ図式化したものであり、動的である意識をいかにしてとらえるかということも考えなければなるまい。

注(2) 都市問題 第六二巻 第七号

「市民意識の開発と方法」 倉沢進を参照

4. 市民意識の発展過程

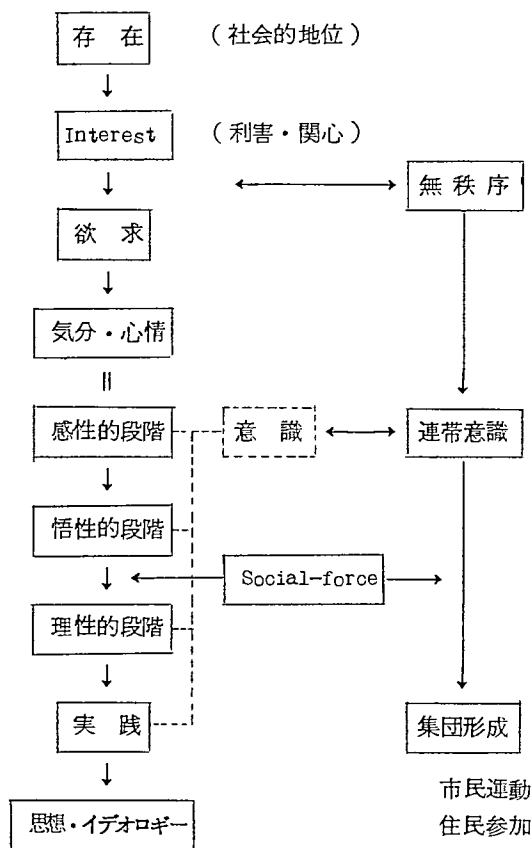
市民意識の発展過程を、個人の内面的な高揚過程と社会関係の構造化という両面から考えてみると、第2図のようになる。

このような過程で発展する市民意識に、潜在的にあるいは顕在的に影響を与えるものとして、①日本社会の構造的特徴(家族主義)からくる人間関係、②行動の目的および手段の選択に基準として作用する価値志向、③政治的勢力、宗教的勢力、伝統的文化力などの社会力(Social Group or pressure group)の三つを考慮しなければ

ばなるまい。

まず、日本社会の構造から出てくる日本人の性格的特徴について述べると、人間の性格を形成する環境として原始的に重要な意義をもつものは、いうまでもなく家族である。(親の養育態度によって子供の性格が決定される、ということとは心理学の分野で周知の事実である。)日本の家族は直系であり、「家」が個人よりも重視され、家長を中心とした身分的序列を家族員に附与している。その家族は、身分的秩序に応じて家族の和が保持される。また道德の根幹をなす親孝行として強制され、人間的欲求をおさえ、絶対服従によって家族の和が保持される。また家族は、それ自体で家格的階層として序列され、出すぎた振舞いをおさえ、分に応じて出処進退し、将来の社会生活においてその和の中に順応しうるような子供の形成を期待する。このように日本人の性格形成は、すべて家族主義的な社会環境の中で行なわれ、その家族の中で形成される「和」と「分」に生きる人間が生み出されてきた。戦後になり、タテ社会といわれる構造は徐々にであるが、同心円的に拡大しつつあるが、今だに前述のような構造は根強く残っている。次いで、価値

(第2図)
(社会的地位)



生活においてその和の中に順応しうるような子供の形成を期待する。このように日本人の性格形成は、すべて家族主義的な社会環境の中で行なわれ、その家族の中で形成される「和」と「分」に生きる人間が生み出されてきた。戦後になり、タテ社会といわれる構造は徐々にであるが、同心円的に拡大しつつあるが、今だに前述のような構造は根強く残っている。次いで、価値

志向について述べると、価値志向とは、人間の行動（何らかの形の欲求充足行動）に際して、その目的および手段の選択に基準として作用するところの、望ましさを観念であり、その人物の多くの生活場面に共通し一貫してあらわれるような傾向性を指している。最近では、社会構造の中間層の平準化と都市化、ならびに若年層の世代文化などで価値志向の変化がおこり、労働組合や企業に対する帰属意識の減退、議会政治や既存政党に対する期待の衰退などが問題となってきた。この価値志向をどのように経験的に把握するか、ということ実は実に難題であって、現在のところ人類学的な調査といえは格式ばって聞こえるが、要するに、生活実態のきめ細かい観察を通じて追体験的に理解し、意欲や感情や思维の基底的な傾向性を抽象化する、という以外に決め手はないようである。最後に社会力について考えると、意識の高揚過程あるいは社会関係の構造化の過程で、社会力（social force）と呼ばれる圧力がかかってくるのである。これらの力は、意識高揚、社会関係の構造化を助長し発展させる極面と、抑圧し、停滞あるいは後退させる極面があるが、ここではどちらが良い悪いの論議は避けた。社会力は、一般的に言って政治的勢力（政党、後援会 etc）、経済的勢力（経営者団体、同業組合、労組 etc）、宗教的勢力（YMCA、仏教青年会、基督教団 etc）、伝統的文化力（講組、無尽、氏子集団、檀徒集団、血縁集団 etc）といわれるものである。

市民意識の判定

前述のような過程で高揚してきた市民意識が、どの程度なのかを知るには非常な困難が伴なり。調査表にあらわれた実数あるいは、バーセンテージにより判定する方法があるが、それでは全体的な傾向を見るにとどまってしまう。またその裏に、タテマエとしての意見であるのか、ホンネとしての意見なのかを判断しなければならぬという側面もある。

そこで試みに、アンケート法による尺度測定を行なってみた。各質問をスケール化し、スコアを付けた。それ

それぞれの質問のスコアをトータルして何点になるかで、その個人の市民意識の高低を判定しようというものである。

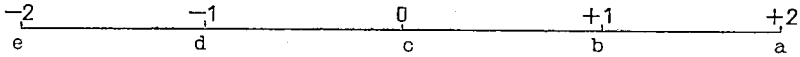
ここでとりあげた質問は、a、不満解決方法、b、市政について話し合ったことがあるか、c、市の広報紙を読んだことがあるか、d、市長の認知度についてである。質問事項は十分とは言えないが、錯誤を承知の上での試みである。スコアは下記のとおりである。

(第3図)

住民としての最低限得点してほしいスコアを3点とし、判定してみると、3点以上のスコアを得た人は、第1表に見るように二二人と五人に一人の割合であり、地域的にみると高いとは言えない。次に近所との接触度、住民の定

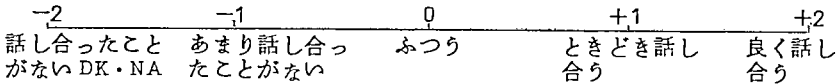
(第3図)

A 不満解決方法

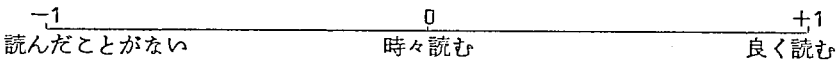


- a: 陳情・請願した。解決のための運動の組織づくりに参加した。
- b: 市役所・県庁・公団などの関係機関に直接たのんだ。自治会・町内会にたのんだ。その他の団体にたのんだ。
- c: 地元有力者にたのんだ。議員などの政治家にたのんだ。
- d: マスコミに訴えた。
- e: 具体的になにもしなかった。DK・NA

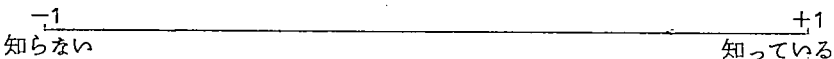
B 市政について話し合ったことがあるか。



C 市の広報紙を読んだことがあるか。



D 市長の認知度



第1表

S	-6	-5	-4	-3	-2	-1	0	+1	+2	+3	+4	+5	+6
N	4	3	7	13	7	15	8	6	14	13	8	1	0
S×N	-24	-15	-28	-39	-14	-15	0	+6	+28	+39	+32	+5	0

$$(S \times N) = -25$$

$$\frac{\sum (S \times N)}{N} = -0.253$$

第2表

接 触 度 と の ク ロ ス	$\frac{\sum (s \times n)}{n}$
顔も知らないくらい。道であえば何かとあいさつする程度	-0.71
留守中のことなど、おたがいにたのみあう程度	-0.14
とくに用事がなくとも親しく訪ね合う間柄、趣味や行事を一緒に行なう親しい間柄	+0.31

定着感とのクロス	$\frac{\sum (s \times n)}{n}$
住み続けたい	-0.44
移りたい	-0.13
DK・NA	-0.35

着感とをクロスして検討してみた。(第2表)
これを見ると、近所との接触度が高い程スコアが高い数値を示しているが、定着感に関しては、住み続けたいと希望している住民よりも、移動を希望している住民の方が高いスコアを示している。

接触度の高い住民が高いスコアを示すということは、コミュニケーションの発展という要素から論ずることができるところである。しかし、定住希望者の低スコアはどこに原因があるのだろうか、その一つにあげられるのは安住の地として安堵感からくる意識的停滞であり、関心が外的なものよりも、内的なものへ志向しているというところであろう。この他にも諸々の要因が複雑に絡み合っていることが推察できる。

(注) 市民意識の判定に用いた調査は、私が昭和四七年一〇月三日―一〇月十六日にかけて、千葉県千葉市幸町二丁目日本住宅公団幸町団地で行なった意識調査を基に行なったもの。